様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１４９３６

研究課題名（和文）前近代オスマン朝の住宅史の再構築：接客空間の形成を中心に

研究課題名（英文）A Reconstructive Analysis of the Early Modern Ottoman Houses and the Formation of Space for Reception

研究代表者
川本　智史（Kawamoto, Satoshi）

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師

研究者番号：１０７４８６６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果の概要は次の通りである。第一に1455年イスタンブル住宅調査台帳の分析により、当時の住宅の大半が小規模な平屋家屋だったと結論づけた。これは18世紀以降オスマン領で普及した中層で規模の大きい都市住宅とは異なる住居類型であった。第二にエジプトの住宅建築との差異が浮き彫りになった。カイロでは中流以上のすまいは中庭を中心として複数の開放的な接客空間をもち、閉鎖的な接客空間を用いるオスマン朝の住宅建築は異なる起源をもつことが示唆される。第三に都市空間の実態解明のため、前近代オスマン都市の行政組織とその近代化を著述したオスマン・エルギンについての論考を発表し、彼の著作の翻訳刊行を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究が対象とするオスマン朝は、中東からバルカンにかけての広大な領域を600年以上にわたって統治した多民族多文化国家であり、今日に至るまで継承される豊かな建築・都市文化を産み出した。今日この地域で伝統的住居とされのは、一階が石造で倉庫などにあてられ、木骨造の二階が主居室となる家屋である。しかしそのほとんどは19世紀以降に建てられたもので、その起源や発展過程はについては不明な点が多い。川本の研究は、接客空間に着目し、15世紀後半の都市住宅と「伝統的住宅」が大きく異なっていたことを明らかにし、当該地域の住居史の発展の一端を解明した。

研究成果の概要（英文）：The research achievements are as follows. First, the analysis of the 1455 Istanbul housing survey register concluded that most of the houses at that time were small single-story dwellings. This type of housing differed from the larger, multi-story urban residences that became common in the Ottoman land after the 18th century. Second, the differences with Egyptian residential architecture were highlighted. In Cairo, middle-class houses and sumptuous residences had multiple open reception spaces centered around courtyards, suggesting that Ottoman residential architecture, which utilized enclosed reception spaces, had different origins. Third, to elucidate the actual conditions of urban spaces, Kawamoto published a biographical study of Osman Nuri Ergin, who wrote about the administrative organization and modernization of pre-modern Ottoman cities, as well as his works being translated and published.

研究分野：オスマン建築史・都市史

キーワード：オスマン朝　住宅　接客空間　前近代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究が対象とするオスマン朝は、中東からバルカンにかけての広大な領域を 600 年以上にわたって統治した多民族多文化国家であり、今日に至るまで継承される豊かな建築・都市文化を産み出した。オスマン建築では壮麗なモスクや高度に発達したな商業建築が研究対象とされることが多いが、宮殿建築をはじめとする住居建築も豊かな伝統を育んできた。

今日トルコ共和国で伝統的住居とされるのもののほとんどは 19 世紀以降に建てられたものであり、「トルコの住まい」のイメージを形作ってきた。一般にこれら住居は一階が石造で倉庫などにあてられ、木骨造の二階が主居室となる。イスラームの戒律の影響で、二階は家族以外の客を迎える「おもて」（セラムルク）と、日常生活の場であり来客時に女性が姿を隠す「おく」（ハレムリキ）の空間に分離される。多くの場合、建物の四隅に居室が置かれ、それをつなぐ中央や窓辺の空間がソファとよばれるおもてとなった。仮にここではこのタイプを完成型とよぶ。また 19 世紀に机や椅子が導入されるまでは、オスマン朝の住居では壁に沿って低い長いすがしつらえられて、日本同様に床座の生活を送っていた。

オスマン建築史研究の泰斗 D.クバンによれば、これに先行して 17 世紀頃にアナトリアにあらわれたハヤト型住居が完成型の祖型になったという。これはハヤトとよばれる半開放の空間を二階にもつもので、ハヤト側の屋外部分に家屋が拡張されれば、完成型へと発展しうることが容易に理解できる。

だがここでさまざまな疑問が生じる。第一に中庭型住居との関連である。稠密な都市構造をもつ中東世界では古くより中庭型住居が一般的であることは考古学調査などからも明らかである。降雨量など気象条件の違いはあるにしても、なぜアナトリアでは中庭型住居に代わって二階に主室を配するハヤト型住居が主流となったのか。クバンは中庭型住居を都市型、ハヤト型住居を農村型と分類するが、都市でもハヤト型が主流だったことは明白である。その一方でトプカプ宮殿のような上流階級の住まいでは、15 世紀から中庭型の空間が採用されてここが儀礼空間になっていたことが、応募者の今までの研究から判明している。

第二の疑問がハヤト型住居の起源である。トルコ民族主義的立場をとるクバンは、トルコ人の祖と目される遊牧民の天幕住居や彼らの空間感覚を根拠として、石造文化圏だったアナトリアに半木骨造のハヤト型住居がもたらされたとする。だが、11 世紀末からはじまるトルコ人のアナトリア移住からはるかに遅れる 17 世紀にハヤト型が成立したとすれば、大変不思議なことである。それまで彼らはどのような住居に住んでいたのだろうか。

２．研究の目的

本研究は、第一に文献史料を用いることにより、16 世紀以前の住宅とその空間の使われ方、とくに接客空間の解明を目的とする。住宅における接客は儀礼的な色合いが強いもので、接客空間は家の顔に相当する最重要な部分である。そのため接客空間を分析することにより、住宅の構成原理を解明することができる。先行研究が文献史料を住宅史研究にほとんど用いていないため、この考察は学術的に独自なものである。宮殿など権力者の館の様子を記述する旅行記や聖者伝など叙述史料と、家屋の内部構造を伝える調査台帳など非叙述史料を合わせて用いる。また同時代の図像資料も補足的に分析する。これらの資料から、接客空間での着座位置や来客の導線などを把握し、その歴史的な変遷も考察する。

第二に現地調査を実施する。とくに重点的に調査する予定なのが、ハヤト型住居が成立したと考えられるアナトリア西部および中央部であり、調査対象は現存する 17 世紀以降のものが中心となる。さらに調査対象を同時代のエジプトの住宅にも広げることで、地域を越えた比較研究を目指す。

３．研究の方法

上述の研究の目的を達成するため、次の方法を用いた。なお 2020 年から始まったコロナ禍のため、予定していた現地調査を全て実行することはできなかった。

（１）1455 年イスタンブル家屋調査台帳の分析

征服直後のイスタンブルに関する最重要史料である本台帳には、当時の都市住宅の姿が断片的に記録される。これを分析することで、15 世紀半ばにおける住居のあり方を考察した。

（２）トルコ共和国およびエジプトにおける住居現地調査

トルコ共和国イスタンブル、トカト、テキルダー、エディルネにおいて、16～19 世紀に建造された住居の調査をおこなった。またエジプトのカイロ、アレクサンドリア、ラシードでも同様の現地調査を実施した。

（３）都市行政官オスマン・ヌーリ・エルギンによる前近代都市の記述の分析

20 世紀初頭からイスタンブル市役所に奉職したオスマン・ヌーリ・エルギンの著作の分析・翻訳をおこなった。これは近代的都市政策が施行されるなかで、伝統的な住宅建築がどのように変遷していくかを考える手がかりとなるものである。

４．研究成果

上述の研究目的・方法により次の成果が得られた。

（１）15 世紀の都市住宅について

1455 年イスタンブル住宅調査台帳の分析により、15 世紀半ばのイスタンブルに存在した住宅の大半が小規模な平屋家屋だったと結論づけられた。これは 18 世紀以降オスマン領で普及した中層で規模の大きい都市住宅とはまったく性格を異にするもので、16 世紀以降都市住宅の空間が大きく変遷したことを裏付けるものである。

以上の内容は 2022 年に国際学会（CIEPO）で発表し、日本語学術論文としても投稿・掲載された。

（２）現地調査による成果

上述した諸都市での住宅調査により、トルコ共和国内に現存する住宅はおおむね 18 世紀以降のものであることが確認された。研究文献から存在が推定された 16 世紀の住居の調査を 2023 年にエディルネで実施したが、残念ながら大幅に改修されてしまっておりオリジナルの姿を確認することはできなかった。16 世紀以前の住居跡が現存しないため、研究成果（１）のように、文献史料ないし考古学的調査からその空間を復元する必要があることが再度確認された。また都市部だけではなく、農村部でも前近代の住宅が存在しないかについての予備調査も実施したが、こちらもほとんど現存しないとの結論に至った。農村が安定的に経営・継承された前近代日本に比較して、トルコ共和国の農村は頻繁に放棄や移転を繰り返した結果、住居も継承されなかったと考えられる。

またエジプトでの調査により、トルコ共和国の住宅建築との差異が浮き彫りになった。カイロでは中流以上のすまいは中庭を中心として、カーアないしマクアドとよばれる複数の開放的な接客空間をもつ。一般に中庭をもたず、閉鎖的な接客空間を用いる 18 世紀以降のオスマン朝の住宅建築とは異質であり、異なる起源をもつことが示唆される。また 18 世紀以降、ラシードに建設された「オスマン帝国の家」も高層化するなどかなりの現地化を見せており、住宅建築の波及と受容の観点から重要な事例であることが確認された。

ここでの知見は今後学術誌への投稿を予定している。

（３）都市行政に関する研究

前近代オスマン都市の行政組織とその近代化についても記述したオスマン・エルギンについての論考を発表し、また彼の都市行政に関する講演録の翻訳刊行を順次継続している。続けている。これは都市空間全体がどのようにデザイン・コントロールされていたかを伝える基礎的資料であり、今後さらなる分析を進める。

以上の研究を通じて、全体として、前近代オスマン帝国における住宅建築の空間をさまざまな視点から探究し、地中海社会における建築文化の一端を明らかにする成果を得た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 川本智史	４．巻 9
２．論文標題 「異教徒の家」－1455年台帳からみる征服直後のイスタンブル	５．発行年 2022年
３．雑誌名 都市史研究	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川本 智史、カワモト， サトシ、KAWAMOTO Satoshi	４．巻 105
２．論文標題 東京モスクと技師吉本與志雄	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies)	６．最初と最後の頁 81-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/120758	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川本 智史、守田 まどか、カワモト サトシ、モリタ マドカ、KAWAMOTO Satoshi、MORITA Madoka	４．巻 25
２．論文標題 オスマン ・ エルギン著 『トルコにおける都市運営の歴史的発展』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Quadrante ： クァドランテ ： 四分儀 ： 地域・文化・位置のための総合雑誌	６．最初と最後の頁 325-338
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/125103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川本智史	４．巻 41
２．論文標題 例会報告要旨：河原温・池上俊一編『都市から見るヨーロッパ史』を読んで 近世オスマン帝国の都市・建築からのコメント	５．発行年 2022年
３．雑誌名 比較都市史研究	６．最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川本智史	4．巻 1
2．論文標題 1455年イスタンブル家屋調査台帳に関する新知見	5．発行年 2021年
3．雑誌名 2021年度日本建築学会大会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 553-554
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Satoshi Kawamoto
2．発表標題 New Dorms for New Elites: The Baltacilar and the Ottoman Palatial Architecture in the Seventeenth Century
3．学会等名 Pacific Rim Ottomanists’ Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Satoshi Kawamoto
2．発表標題 The Guardians of the Imperial Harem: Baltacilar/Axemen and the Ottoman Palaces
3．学会等名 2022年度九州史学会大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 川本智史
2．発表標題 1455年イスタンブル調査台帳における住宅建築の分析
3．学会等名 2022年度日本建築学会大会学術講演会（北海道）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Satoshi Kawamoto
２．発表標題 Istanbul in 1455
３．学会等名 CIEPO(Comite International des Etudes Pre-Ottomanes et Ottomanes) 24th symposium, Thessaloniki
４．発表年 2022年

１．発表者名 川本智史
２．発表標題 1455年イスタンブル家屋調査台帳に関する新知見
３．学会等名 2021年度日本建築学会大会学術講演会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 ロス・バーンズ、松原 康介、松原 康介、柴田 大輔、藤田 康仁、杉本 悠子、川本 智史	４．発行年 2023年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 368
３．書名 アレッポ	

１．著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 288
３．書名 西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀	

１．著者名 守川知子(川本智史)	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 272
３．書名 都市からひもとく西アジア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

アヤソフィアの再モスク化決定について
https://qalawun.aa-ken.jp/blog/20210331_503/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関